

補遺-2 (G 多賀城市八幡地区) 2011年11月21日(月)

報告者名	沼田 愛	被調査者生年	1943年(男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	八幡上一区長
補助調査者	沼田 愛		

話者の経歴

話者は昭和18年に塩竈で生まれた。実家は港で船関係の仕事をしていた。昭和33年に中学を卒業、東京に就職して出て行くひとも多いなか、地元で技術を身につけるのも良いのではという親の薦めに従って、塩竈にある時計屋に修行に入った。当時塩竈には時計屋が数十軒あったが、弟子をとるのはある程度構えの大きな店だけだった。修行は住み込みで、先輩が7、8人おり、12年間ほど修行をした。

昭和47年には独立し、多賀城市八幡地区で開業した。八幡に移ったきっかけは、塩竈で修行をしていた頃から商工会を通じて仲のよかった知人が八幡の出身で、現在の話者宅の向かい側にハンコ屋を開業し、これからは多賀城が盛り上がると話者にも開業を勧めたためである。兄弟子が独立していくのを見ていたので、自分も独立したいという気持ちが強かった。開業の意志を伝えるときは修業先から引き留められた。八幡に来てすぐは、知人のハンコ屋に住み込み、隣の布団屋のスペースを間借りして店を出した。そのころ現在地には農家が住んでいたが、1年半後くらいにその農家が他所に移ったので現在地に移った。

30歳のときには、姉の夫の同僚の世話で福島県飯舘村の出身の妻と見合いし、結婚した。

42歳のときには家を買った。その家屋は一昨年(2010年)の12月29日に火災に遭い、現在の家屋は昨年(2011年)10月に完成した。火災に遭った際には修理の道具も傷んでしまい、同僚(同業者仲間)から、親が使っていたという古い道具などを譲ってもらったりした。時計店では、部品をそれぞれの製品にあわせて製造しながら修理をする。時計修理をできる店が少なくなったので、口コミで仕事が入り、多賀城だけではなく県外からも顧客が来ている。記念品の時計など、顧客にとって思い入れのある時計が直って喜んでもらえるのがとても嬉しい。

話者は商工会議所の役職も務め、プロレスを呼んだり、カラオケ大会や花いっぱい運動をしたりと、さまざまなことに取り組んだ。現在も、多賀城市と七ヶ浜町の合同でスタンプ会を行っている。地元の店で買うとポイントがたまり、それを地元の店で仕えるという仕組みだ。また、八幡上一地区の区長になって12~13年になる。行政と地域とのパイプ役を務めている。多賀城市全体の区長の集まりである区長会は、理事を12、13人おいており、八幡地区からの理事として出席している。民生委員も20数年間務めている。八幡公民館長も兼務している。家が公民館のすぐ裏なので、以前から公民館の鍵を預かっていた。

話者は臨済宗願成寺(塩竈市錦町)の檀家である。話者の実家も臨済宗だった。話者の家の神棚には八幡神社と塩竈神社の札を入れている。このあたりは八幡神社の氏子が多い。

地区の概要

八幡上一区は、平成元~2年頃、当時の八幡上区を八幡上一区約400戸と八幡上二区約300戸に分割させることで、現在のかたちとなった。戸数が増加し過ぎるといろいろ行き届かなくなると考えた話者が働きかけて実現した。

地区にはもともと八幡に居住していた「旧住民」よりも、他所から来た「新住民」の方が多く、その割合は3対7である。区内は20班もしくは21班に分かれており、役員20数名を選出する。総会を開くほかに、町内会の行事ともリンクさせながらグラウンドゴルフや夏祭り、芋煮会を行っている。総会や行事には「旧住民」の方がや

や集まり良いが、「新住民」との間で極端に出席率に差はなく、「新住民」も協力的で、行事などの出席率も低くはない。総会には住民が約 100 名集まる。震災後の今年 10 月にも、多賀城市立八幡小学校の校庭を会場にしてグランドゴルフおよび芋煮会を行ったが、例年並みの参加者約 100 名が集まった。団結力のある地区だと話者は思っている。

八幡上一区を範囲として町内会がある。町内会には、多賀城市より一世帯あたり年間 410 円の計算で世帯数分の補助金が出る。これは市の広報物を配る班長の収入になるが、八幡上一区町内会では、この倍額を班長に支払っている。ほかに街路灯の修繕や電気代の費用の半額が補助される。一方、町内会では 1 世帯あたり月に 350 円を集金している。現在自宅の立て替えや、修繕を終えて仮設住宅から戻ってきた世帯からは、戻ってきてからの月数分の町内会費をもらっている。

4、5 年前までは八幡の 5 地区（八幡上一区、上二区、下一区、下二区、沖区）に加えて桜木 4 地区の区長も、八幡神社の氏子総代とともに、行事の準備や段取りなどを行っていた。現在は総代だけで手が足りると言われ、行事などは総代だけで運営し、区長は関わっていない。しかし、収穫祭や 4 月第 3 日曜日にある例大祭などには呼ばれている。

震災後の対応

八幡上一地区では高齢者 2 人が津波から逃げ遅れ、自宅で亡くなった。また、震災以前は約 500 戸が居住していたが、そのうち約 100 戸が仮設住宅などに移転している。区の南側は海に近い低地のため津波の被害が大きく、区全体で津波の被害を免れたのは 20 班あるうちの 5 班のみであった。

話者は八幡公民館の館長でもあるため、震災の時も地震がおさまったらすぐに鍵を持って公民館を開けに行った。震災当日は寒く、停電していたので、石油ストーブや発電機を手配した。公民館の備品であったブルーシートや懐中電灯も出した。公民館のほかにも不磷寺や宝国寺、その周囲の民家に避難してくるひとがいた。また、たまたま車で八幡のあたりを歩いて被災した県外のひともいたので、話者は服を提供したりした。話者は公民館にいたため、防災無線での津波の警告の有無や、いつ津波がきて、引いていったのかなどはわからない。

公民館は耐震工事を施していたことが幸いした。以前の公民館は昭和 44、45 年頃に建てたものであったため、話者は区長に就任して以降、宮城県沖地震などを想定して建て替えたいと思っていた。そのため上一区町内会の会費から積み立てをして、費用 1,700 万円を工面した。耐震工事を施して建て替えを行い、今年 3 月 12 日に工事の終了を確認するはずだった。そのため、まだ足場が組まれているままだった。建設に携わった職人さんの一家 5 人が震災で亡くなっている。

公民館は指定避難所であったので、食事は届けられるようになった。公民館は約 1 ヶ月間避難所となり、のべ 200 人くらいが避難していた。話者も 1 週間ほど避難所で寝泊まりし、給水作業などで市の職員と一緒に夢中になって動いた。運営に関して非難されることもあったが、一生懸命やった。震災後 2 ヶ月間は、毎朝 9 時に八幡の 5 地区（八幡上一区、上二区、下一区、下二区、沖区）の区長が集まってミーティングを行い、市に必要な物資の申請などを行った。また、盗難などの被害を防止する目的で市の職員らと 2、3 人で組になって懐中電灯を持ち、パトロールも行った。夜中にイオン（ショッピングモール）を見回したときは、かなり恐かった。

震災後の安否確認では、要援護者である高齢者の 40 人くらいを中心的にまわった。震災から 1、2 ヶ月後からは公民館が落ち着いてきたので、所在がわからない町内会の住民を捜して文化センターや総合体育館、山王公民館などを歩いてまわった。ほとんどの住民に会うことができ、みんなに喜んでもらった。これは自分がすべき仕事だと思ってやった。仮設住宅に入っているひとの多くが、自宅を修繕して八幡地区に戻ってくる予定だという。

話者の自宅は震災で床上 50 センチメートルまで浸水し、床下にも泥が積もった。家にいればもう少し対処できたのかもしれないが、公民館に出すっぱりでどうにもできなかった。畳は先月張り替えたばかり。向かい側のハンコ屋は 1 メートル 50 センチくらい波をかぶったので来月解体する。時計屋の仕事は 8 月頃から再開した。今回の震災では工具に大きな被害はなかったが、書類がぬれてしまった。

現在、震災後の安否確認のようなことは行っていないが、地区内の要望を市に取り次ぐ仕事は行っている。たとえば、堀がつかったり、道路に凹凸ができていたり、ゴミの集積場が流されている。津波のあとから沖の石の池の

水がくさいこと、被災した車の撤去をしてほしいこと、掲示板が傾いたままであることなども、市役所にかけ合っている。蔵王山の石碑も地震で倒れたので、市にかけあって直してもらった。現在はお参りするひとはいない。

今後も地域を活性化していくために、町内会と市のパイプを作ることが大切であり、そのために、みんなの声を行政に反映させていきたいと話者は考えている。行政には、地区内にある、歌枕「末の松山」や「沖の石」を観光ルートに入れてさらに活用することを望みたい。これらは市で管理しているが、有志も草取りなど協力する。商工観光課が窓口だった頃は、話者も掃除に参加した。



写真1 時計修理職人である話者の仕事場にて。左は補助調査者。